

## 遠山潮徳の生涯と実績

著者	森山 治
雑誌名	立正社会福祉研究 = RISSHO Journal of Social Welfare Studies
巻	16
号	1
ページ	31-39
発行年	2014-09-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/48245">http://hdl.handle.net/2297/48245</a>

# 遠山潮徳の生涯と業績

森 山 治

CHOTOKU TOYAMA Career and Achievement

Osamu MORIYAMA

立正社会福祉研究  
第16巻1号（通巻第29号）  
2014年9月

RISSHO Journal of Social Welfare Studies  
Vol. 16 - No. 1  
September 2014

## 遠山潮徳の生涯と業績

森 山 治\*

### はじめに

本論文は昭和初期において立正大学で教鞭をとった遠山潮徳(1891~1931)の生涯と業績について論じたものである。

遠山は1927(昭和2)年3月に6年にわたるアメリカでの布教活動・留学生生活を終え、4月から立正大学として発足した母校へ、予科教授・学部講師・専門部講師として就任し、1931年3月に扁桃腺炎のため急死(享年39)するまでのわずか4年間といった短い在職期間に教鞭をとった。従って大崎学報に掲載された論文も2編にすぎず、遠山についてはその死後急速に忘れられていった。後年、わずかに森永松信によって書き記された文献からその存在をうかがい知るだけで、今まで詳しい人物像については不明なことが多かったといえる。<sup>1)</sup>

今回、遠山を題材にした理由は、立正大学の社会事業教育において遠山がその担い手として期待された人



眞の探教山道敬

出所：『教育と宗教』第3巻第5号

物であったとする後述の森永の記述がきっかけとなっている。大正時代に多くの宗教系大学・専門学校が社会事業教育に着手したように、日蓮宗大学は1920(大正7)年には本科授業として感化救済、社会政策を設置している。しかし、教育の担い手としては、非常勤講師である北沢新次郎や生江孝之が社会問題・社会政策・社会事業といった科目を受け持ち、専任として社会事業教育を担う人物は明らかではない。日蓮宗大学を母胎として発足した立正大学社会学科は、学生の多くが宗門子弟であったことや、日蓮宗大学時代に設立された社会問題研究会の影響もあり、当初は社会学理論の研究よりは社会事業の実践と研究に比重がかけられていたといわれている。その様な環境のなかで遠山は21歳の時に日蓮宗大学予修科へ入学し、アメリカにおける布教活動、大学・大学院での留学生活を送ったのち母校へ専任教員として迎えられた。森永は社会事業教育を担う専任教員として遠山潮徳の名前をあげているが、実際には遠山とはどのような人物であったのか(表1)、森永のいうとおり社会事業教育の担い手として期待を持たれていたのかに注目しつつ、遠山への追悼文、月刊宗報及び遠山が記述した文献の収集、整理を中心に検討をおこなった(表2)。加えて先行研究である森永の記述について批判的な視点を含めながら、遠山潮徳の生涯と業績について新たに記すことが本論文の目的である。

### 1. 森永松信による遠山潮徳像(先行研究の検討)

遠山についての記述は大学史等を調べてみても、森永による記述以外は見当たらない。森永が記述した社会学科小史では遠山を次のように紹介している。

\* 金沢大学人間社会学域地域創造学類福祉マネジメントコース教授  
キーワード：立正大学、日蓮宗、社会事業教育、海外留学

『当時、遠山潮徳教授は、仏教者として、社会事業の研究に専念し、大正末期にアメリカ合衆国のサウスカルフォルニア大学に留学し、当時の世界的巨匠デヴァイン（E.T.Devine）に師事し、3ヶ年の学究生活を終えて昭和2年に帰国され、「社会問題研究会」の活動を援助された。<sup>2)</sup>』

また、森永による論文<sup>3)</sup>には遠山の仏教社会事業思想について浅野研真、矢吹慶輝、長谷川良信と並べて記述があり、1928（昭和3）年に開催された日本宗教大会での遠山の発表内容が共同募金活動の先駆的な紹介例であると指摘している。同じく森永の他の論文<sup>4)</sup>においても仏教社会福祉思想を代表するものとして、遠山を姉尾義郎、浅野研真、長谷川良信らと共に紹介している。こうした森永によって記述されてきた遠山像は田代の論文<sup>5)</sup>にも影響がみられるように、森永が記した若き社会事業研究者像が立正大学での一般的な理解となってきた。

しかし、森永の立正大学への入学は1931（昭和6）年4月の入学であることから、実は森永自身は直接遠山から教えを受けた経験はない。その為か森永の描く遠山像についても本論文で指摘するように過ちは多い。森永の描く遠山像は、森永自身によってつくられた遠山像ではないかと疑問を持たざるを得ない。

今回、新たに発掘した資料等によって、これまで謎であった遠山の経歴がかなり明らかとなった。遠山は明治から大正期にかけて波瀾万丈の生涯をおくり、昭和の初めに帰国してからは、日蓮宗僧侶・立正大学教員として、将来の幹部教員候補として大きな期待を集めていた。その死に対しては多くの宗門・大学関係者がその早すぎる死去を惜しんでいる。

第2章においては、遠山の経歴を5期に区分しながら整理・検討をおこなう。

## 2. 遠山潮徳の経歴

### (1) 出生から僧侶・学問の徒としての函館時代（1891.12～1913.3）

遠山は1891（明治24）年、現在の北海道室蘭市輪西町（原籍。室蘭市大字輪西町187）に遠山巒の4男として出生した。室蘭市の歴史をみると、1887（明治20）年5月に当時の室蘭郡輪西村に屯田兵110戸、89年にはさらに110戸が移住入植<sup>6)</sup>している様子がみられる。遠山の両親も屯田兵として輪西村に移住入植した人たちの一員と推測することは出来るが、確かなことはわから

ない。参考までに1911（明治44）年7月に発行された『寺院名簿』（日宗新報社）をみると、当時の室蘭郡には日蓮宗の寺院は見当たらず、従って遠山が宗門子弟の出身であったとは考えにくい。残念なことに遠山の生い立ちを記したものはそれ以上発見できず、次の遠山の足跡は1903（明治36）年頃、12歳で妙隆寺にて得度（菊池日解師による）をしたことが明らかとなっている<sup>7)</sup>。妙隆寺は現在もJR北海道江差線久根別駅の近くに現存（北斗市東浜）している。建立は1865（慶応元）年3月、日蓮宗信仰者の上磯郡有川村の者が妙隆庵として建立し、1879（明治12）年に妙隆寺と改称している。

佐々木の研究によると、妙隆寺を含め、当時上磯地区に設立されていた寺院8ヶ所は、近世の末期には箱館（現。函館）の寺院との間の本末制に組み込まれ、末寺である寺には函館の本寺から派遣された留守僧によって、仏事一般が執り行われ、檀家信徒の布施に務めている<sup>8)</sup>。妙隆寺も函館の実行寺<sup>9)</sup>の末寺として組み込まれ、遠山が得度をした1903年頃は、妙隆寺住職として1897（明治30）年から1913（大正12）年にかけて栗塚行好が実行寺から派遣されている<sup>10)</sup>。従って、菊池日解は妙隆寺住職ではなく、実行寺に関係した僧侶と考えられるが子細は不明である。その為、遠山が僧侶として妙隆寺で修行を励んでいたのか、それとも本寺である実行寺で修行に励んでいたのかも不明である。しかしながら筆者は望月日謙との出会い、函館中学校への進学といった出来事から類推することによって、遠山が実行寺で修行を積んでいた可能性が高いと考えている。

望月日謙（1865～1943）との出会いがなければ遠山は生涯を日蓮宗の一僧侶として終えていたかもしれない。望月との出会いによって人生の転機が訪れることとなる。望月は1909（明治42）年に実行寺の住職に就任した。望月はのちに立正大学学長、日蓮宗官長に就任する人物であるが、実行寺住職として1909年から13年の4年間にわたり函館に在住した。その間に遠山は望月の知遇を受けることとなり、梅津福次郎<sup>11)</sup>、菅谷叶子<sup>12)</sup>の支援をうけ、道内で公立として最初に開校された北海道庁立函館中学校（現。北海道函館中部高等学校）へ進学することとなった。北海道庁立函館中学校は1895（明治28年）4月、元町39番地に開設され、1899（明治32）年4月に函館中学校と改称し、1906（明治39）年1月7日に現在の時任町へ新築移転している<sup>13)</sup>。従って

1913年に中学を卒業した遠山は、時任町へ移転した函館中学に通学していたこととなる。ちなみに、妙隆寺のある上磯と函館間の鉄道開通は1913（大正2）年9月15日（上磯軽便線）である。北斗市歴史年表によると、1919（大正8）年4月11日に久根別乗降所が久根別停車場に改称され、乗客・小荷物の取り扱いを開始したとある。<sup>14)</sup> 遠山は1913年3月に中学を卒業しているので、久根別から徒歩で時任町まで徒歩で通学したことも考えられるが、久根別から函館中学校までの距離は現在の整備された道路でも10キロ以上はあり、道路事情の悪い大正初期、特に積雪の多い厳冬期に徒歩で毎朝通学するのは困難である。その為函館市内の実行寺から通学したと考えるのが妥当と考えられる。

遠山がいつ函館中学に入学したかは定かではない。<sup>15)</sup> 卒業は1913（大正2）年3月であり、函館中学の15期生にあたる。遠山は既に21歳になっていた。卒業後日蓮宗大学予修科入学のため遠山は東京へ旅立つこととなる。

## (2) 日蓮宗大学予修科入学から海外布教・留学へ (1913.4~1920.12)

函館を旅立った遠山は日蓮宗大学予修科に入学する。予修科とは、普通中学校卒業者が予科に入るまでの予備科として設置されていたものであり、仏典を専修することを目的として設置されていた。既に得度を済まし寺院での修行経験があると思われた遠山が他の普通中学校卒業者と同様に扱われたことに、筆者は当初違和感を感じたが、11歳より山梨県長遠寺住職時代の望月に預けられていた石橋湛山（後の立正大学学長・内閣総理大臣）の回想録を参考とすると、当時の寺での子どもの仕事は、掃除、師匠の居間の掃除、お客へのお茶だし、食事の給仕といった日常生活の雑事をおこなうことが主な役割であったと回想している。<sup>16)</sup> 従って、遠山も函館の実行寺では主に寺の雑役を担っており、予修科に入学することによって専門的に仏典を学び始めたと理解できる。遠山による学生生活への回想記には、予修科では週45時間ある仏書教育に泣かされたこと、4時間の英語の授業で一息ついたと振り返っている。<sup>17)</sup> 1年後、日蓮宗大学予科へ入学し、その後順調に日蓮宗大学本科へ進学している。1918（大正7）年3月に遠山は本科を卒業し、4月から日蓮宗大学研究院へ入学した。この間、研究院時代は給付生（1918.4~1921.5、月15円給付）となっている。遠山の学生時

代については、月刊宗報の記事と馬田行啓（当時、財団法人立正学園理事長、前立正大学教授）による遠山への追悼文から様子を知ることが出来る。月刊宗報には、本科2年時に学術優等賞を授与されたこと（5号、1917.4）、卒業生総代であったこと（17号、1918.4）が記されている。馬田は追悼文において学生時代の遠山を次のように回顧している。『この時代已に君は其の優秀な才能を凡ての人から認識され、其の将来を嘱望されていた。予科から本科続いて研究院と、いつも首席で通し、しかも其間に趣味としては筑前琵琶を習い、教化方面に於いては日蓮聖人の「止暇断眠」の教訓に基いて「断眠会」を組織し、大崎町民の教化に貢献した熱心と努力と多能とには驚嘆を禁ぜざるものがあった。』<sup>18)</sup> 優秀な才能との馬田の言葉に嘘がないとおり、戦前から戦中にかけて立正大学から社会学の研究を目的に留学生となった者は6名（遠山潮徳、志水義暲、久保田正文、坂本泰護、木全英照、森永松信）であり、そのうち海外へ留学を命ぜられたのは3名（遠山潮徳、志水義暲、久保田正文）に限られている。久保田正文（1896~1986）は、長年にわたり立正大学教授・学監として活躍した者だが、東京帝国大学を1924年に卒業し、1926年3月から1929年3月にかけてイギリスへ留学を命じられている。志水義暲（1888~1954）は1914年に東京帝国大学を卒業し、日蓮宗大学中等部教頭や、創設まもない社会問題研究会の顧問を務めた人物である。1925年12月から1928年6月にかけてドイツへ留学しているが、帰国後は立正大学へ常勤教員として戻った様子は無く、1935年からは文部省督学官、教学局教学官といった文部官僚を務め、旧制佐賀高校校長を最後に1946年退官している。久保田、志水の両名は東京帝国大学で社会学を専攻し、海外留学も立正大学に昇格後の派遣であり、大学としても研究者養成を目的とした留学であると目的がはっきりしていたのに対し、<sup>19)</sup> 遠山は唯一日蓮宗大学出身であり、研究院では宗学を専攻とし、留学の主題となる社会学は専門外であるともいえる。しかし、馬田に従えば、学生時代から僧侶・研究者として将来を嘱望されていからこそ、数少ない海外留学生に選ばれたとも考えられる。遠山は研究論文を1920年11月に大学へ提出後（卒業は翌21年5月）、12月にはロサンゼルス日蓮教会主任開教師（1923年1月まで）として渡米している。なお遠山が研究に専念出来るのはロサンゼルス日蓮教会主任開教師を辞任する1923年2月以降である。

(3) アメリカ日蓮教会主任開教師時代（1920.12～1923.1）

渡米した遠山の足跡については、月刊宗報並びに大崎学報によって帰朝まで一定の報告がされている。また、渡米中に遠山自身が記した執筆物（在米婦人の友）を多数見受けることが出来る。

まず最初に遠山が日蓮教会主任開教師として渡米した理由であるが、馬田がいうとおり、学生時代から熱心に布教活動をおこなっていた遠山であるから、布教に対する使命感が強くあったといえよう。併せてアメリカでの研究の機会を得るための手段であったことも考えられる。しかし久保田、志水兩名も僧籍にありながら、留学の目的は社会学研究に限定したものであり、遠山のように開教師としての役割は担っていない。

なぜ遠山が海外布教に対して意欲的であったと考えられるのか、その答えの一つとして、遠山が視察報告のなかで布教師として海外に赴く者の心構えとして、日持大聖人の再来としての使命を全うする決心を持つことを記していることに筆者は注目する。<sup>20)</sup> 遠山の海外布教へ赴く動機の一つとして、日持に対する個人信仰の影響も否定できないと考えている。

遠山の記す日持（1250～没年不詳）とは、蓮華阿闍梨とも称される日蓮六老僧の一人である。実は、遠山が修行した実行寺と実行寺のある函館、及び遠山が師事した望月は、日持との関係が深い。

実行寺には海外布教を目指したと伝えられる日持が「南無妙法蓮華経」と刻したとされる経石が存在する。元々は函館山頭にあり、古跡として函館区（当時）から保存を受けていたが、1898年に函館砲台要塞築城部から移転を命ぜられ、船見町山の上に移動した。この経石と日持については実行寺住職であった望月によって宗門の内外に宣伝され、日持に対する個人信仰が函館とその周辺部において定着していったといわれている。<sup>21)</sup> 遠山は日持への信仰が函館に流布されていた時期に望月の下で修行をしており、日持＝海外伝道者としてのイメージを強く持っていたと考えられる。従って、遠山が布教師として海外に赴くことは、アメリカでの社会学研究のみを目的に渡米したという理由だけではなく、自らの姿を日持に重ね合わせ海外への布教に対して意欲的であったともいえるだろう。

なお、遠山の視察報告を読むと、<sup>22)</sup> 渡米を決心したのは8月のことであり、12月4日には日本を出発し、12月14日にハワイ州オアフ島ホノルル港に到着、翌15日

に上陸、日蓮宗教会に参拝し、数日滞在している。その後22日にサンフランシスコへ上陸、23日にロサンジェルスへ到着している。就任式は翌年1月16日である。1914（大正3）年に設立されたロサンジェルス教会は、旭寛成師（在職期間1914.5～1914.10）が本務の布教地朝鮮半島へ戻った後、北川智旭師（在職期間1915.4～1916.4）、山下義静師（在職期間1917.6～1919.10）と主任開教師は短期間に変わり、遠山が赴任するまでの約1年間は主任開教師は不在となっていた。なお遠山は在任中に教誌「天晴」を発行していたと、後任者の池田順教の記述で明らかとなるがその内容は不明である。<sup>23)</sup> また、1924年には教会設立10周年の記念として遠山・池田両氏の著述による「人と佛 日蓮主義の要領」がロサンジェルス日蓮教会から出版されている。<sup>24)</sup>

遠山は1923年1月までロサンジェルス日蓮教会主任開教師として従事し、後任の池田へ引き継ぎ、自身は南カリフォルニア大学で社会学を専攻する傍ら、副専攻として宗教教育学を学ぶこととなる。しかし、池田の著書を見ると、進学後も遠山は池田と共同生活をしながらロサンジェルス日蓮教会の活動に従事していた様子がうかがえる。<sup>25)</sup>

(4) アメリカ留学生時代（1923.12～1927.3）

南カリフォルニア大学は1880年に創設されたロサンジェルスにある私立大学である。遠山が入学した時期は明らかではないが、遠山の記述から、ボガードス教授に2年間指導を受けたとあるため、およそ2年間の就学期間であったと考えられる。大学での勉強は入学当初はかなり苦労した様子がうかがえる。その理由として遠山は自身の大学時代の専門（宗学）と留学先での専門（社会学）が異なること、語学上の困難をあげている。留学仲間であった竹内道説（後に駒沢大学教授）によれば、当時の南カリフォルニア大学には、英語を母国語としていない外国人クラスがあり、そこに、日本、朝鮮、中国、フィリピン、ロシア、アルメニア、イタリア等からの留学生が在籍し、遠山もその中の一人であったことが語られている。<sup>26)</sup>

南カリフォルニア大学ではボガードス（Emory Stephen Bogardus, 1882～1973）の下で社会学の研究に従事し、他方宗教教育学については、ハーツホーン（Hugh Hartshorne, 1885～1967）に師事をしている。

ボガードスは、社会的距離尺度（social distance scale）の考案者として我が国でもその名が知られてい

る社会学者である。シカゴ大学で学位を取得し、心理学的社会学の立場にたち、当時南カリフォルニア大学の教授となっていた。1931年にはアメリカ社会学会第21代会長も務めている。<sup>27)</sup>

ハーツホーンは、宗教教育学者（プロテスタント）として、ユニオン神学校、南カリフォルニア大学、コロンビア大学のティーチャーズカレッジとエール大学神学校の教員を務めている。<sup>28)</sup> 1922年に南カリフォルニア大学へ赴任していることから、遠山が南カリフォルニア大学で1年半の間指導を受け、その後コロンビア大学へ異動するにあたり、遠山へコロンビア大学大学院への進学を積極的に勧めていたハチソン博士とは、ハーツホーンのことと思われる。<sup>29)</sup> コロンビア大学大学院への進学は、ハーツホーンによる勧めによるものだけではなく、遠山が専攻していた社会学・宗教教育学の両方の研究が可能な環境にあったからである。当時のコロンビア大学には、社会学者として著名なギディングス（Franklin Henry Giddings, 1855～1931）が在籍しており、他方、宗教教育学の分野においても著名なコー（George Albert Coe, 1862～1951）が在籍していた。

遠山は1924年6月に無事南カリフォルニア大学を卒業し、Bachelor of Artsの学位を得ている。しかし卒業後すぐにコロンビア大学大学院へ進学出来たのではなく、羅府新報記者、南カリフォルニア大学の調査員としてロックフェラー財団による日本人太平洋沿岸在住調査に着手していた様である。当時は排日運動が盛んでありこの調査もそうした社会背景があつての調査と推察できるが、遠山自身は排日運動の影響はなく勉強を続けていると伝えてきている。<sup>30)</sup> この調査研究は後に論文『The Sociological Research of The Anti-Japanese Movement in California』（大崎学報75号）に活かされたといえる。

就労等は学費の調達が目的であったが、馬田の記述によると、海外留学生として認められても当時の宗門の事情として十分な学費が支給できなかったことにその原因がある。<sup>31)</sup> 参考までに1923年10月から24年9月迄に遠山に送られた学資金は金900円であり、換金すると357\$50¢であった。遠山は1925年9月からコロンビア大学大学院へ入学するが、ニューヨークの生活費は高く、大学費用が1年（2月期）で350\$かかり、生活費は毎月120～130\$かかる日本への通信で愚痴をこぼしている。<sup>32)</sup>

なお、在米中に遠山が寄稿している『在米婦人之友』は、1918（大正7）年創刊の雑誌であり、文生書院より現存するものが13巻分復刻発行されている。今回収集した論文資料も復刻されたものを参考とした。この中には若き日の遠山と思える写真も文章とともに掲載されている。<sup>33)</sup>

遠山は1925年9月から念願のコロンビア大学大学院へ入学し、社会学及び宗教教育学の研究に従事している。26年6月の卒業に際して、Master of Artsの学位を受けている。

コロンビア大学大学院での研究生生活について子細は不明であるが、遠山と同年代で、一足早くコロンビア大学に留学し、1921年に博士号を取得し帰国した岩崎卯一（元関西大学学長、1891～1960）の著書に当時のコロンビア大学での履修・修学条件が次のように述べられている。『コロンビア大学の社会学部では、日本の官立大学と同じように、普通講義（General Courses）と、研究講義（特殊講義）（Research Courses）とに区別されています。この中、後者には又、講義と演習との区別があります。普通講義は、社会学を専攻する初年生は勿論、その他の社会科学関係の学を専攻する学生達にも等しく公開されているものです。特殊講義は、社会学を専攻する学生達のみが聴講するもので、まず普通講義を聴きその試験を通過したということを経験していることもまた日本の官立大学と変わりありません。特殊講義を聴き演習に参加する社会学専攻学生にまた二種あります。一つは、Master of Artsの学位に対する候補者であり、他は、Doctor of Philosophyの学位に対する候補者です。勿論、この二種の学生に課せられている条件は著しく相違します。マスター候補者の短期在学年限は一年で、語学の特別素養を要せず、且つ学位論文を出版する義務がないのです。それに反して、ドクトル候補者の在学年限は短くとも二年以上であり、独仏語の素養を要し、且つ学位論文を自費で公刊せねばならぬという面倒な条件を課せられています。そして、ギディングス教授から、特殊講義または演習等を通じて、特別指導を受ける学生は、主としてドクトル学位に対する候補者です。<sup>34)</sup>』

岩崎の記述を参考とすれば、遠山は最短の在学年限で卒業し、Master of Artsの学位を受けたことになる。日本への通信では、卒業後、半年は宗教教育学を調べたい希望があること、その後ヨーロッパに渡り、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなどをみて帰った

いと希望しているが<sup>35)</sup>、ヨーロッパへ出向いた様子はなく、1927年3月6日ロサンジェルスを出発し（大阪商船ラプラタ丸乗船）、28日に横浜港へ入港している。

#### (5) 立正大学教員就任後の動向（1927.4～1931.3）

帰国した遠山は4月から立正大学予科教授・学部講師・専門部講師として迎えらる。1927年度の講義担当は、予科の英語、学部の社会学・社会問題、専門部の社会学・社会問題であった。ちなみに隣接と思われる他の講義担当は、社会問題及社会政策は北沢新次郎、社会政策は生江孝之、社会学・法学は二子石武喜が担当している。

遠山は講義の他、立正大学社会問題研究会会長を馬田から引き継ぎ、あわせて立正大学日曜学校の主任となっている。その他、日蓮主義普及会の活動や立正高等女学校教諭（嘱託）、立正学園女学校教諭（嘱託）も引き受けている。宗門活動としては、6月15日から3日間開催された第10回中央布教講習会講師、7月19日から18日間にわたる立正大学九州学友会布教隊の活動に参加している。この活動についての子細は、日蓮宗によって発足した伝道組織（日蓮主義普及会）の教誌「日蓮主義」創刊号に遠山自ら紹介記事を書いている。加えて大崎学報72号には論文『自然淘汰について』を寄稿するといった働きをしている。翌28年からは講義の他、大崎学報の編集者を務め（29年まで）、大学創立25周年記念誌『吾等の大学』の編集人及び執筆も担っている。6月5日から4日間開催された日本宗教大会では「社会事業資金連合募集に就て」（6日）について発表し、7月29日から31日にかけて北海道夏期講習会（函館市）、8月20日から24日にかけての軽井沢銷夏大学講師としても参加している。多忙な業務に加え驚くべきことに、ほぼ毎月「日蓮主義」への寄稿、「大崎学報」への論文執筆といったハードスケジュールをこなしている。

29年には、立正大学専門部教授・学部助教授・立正大学幹事へと昇格し、対外的な活動、執筆量は抑えているが、雑誌『教育と宗教』の編集責任者の一人となっている。30年7月には専門部部長事務代理となり大学幹部職員としての役割が期待されるなか、7月28日から30日にかけての第7教区布教講習会（三重県津市）、8月1日から7日にかけての岐阜市民講座（岐阜市）講師として出向くほか、「日蓮主義」、「教育と宗教」へ死去の前月まで定期的に投稿している。

### 3. 突然の死（1931.3）

遠山の死は予期せぬほど急なことであった。月刊宗報173号には死去までの様子が記述されている。それによると、3月初旬より軽微な風邪にかかっていたところ、14日に扁桃腺炎を併発、16日に入院、手術をおこなうも22日11時52分に永眠している。日蓮宗は同日付で権僧正を贈っている。密葬は大檀林のあった高輪承教寺で23日におこなわれ、本葬は28日に同じく承教寺にておこなわれている。日蓮宗・立正大学関係者の他にも、立正高等女学校関係者、立正学園女学校関係者など数百名に及ぶ参列者に対し、宗報は近来稀に見る盛大な葬儀であったと記しているほか、日蓮主義6月号にも本葬の写真が掲載されている。最後に遠山の家族についてはふれることはなかったが、遺族として夫人と子ども（女兒）が残されている。



出所：『日蓮主義』5巻6号

### 4. おわりに（今後への研究課題）

遠山の生涯を振り返ると、森永が記述した遠山像とは異なり、必ずしも立正大学の社会事業教育のにない手であったとは断言出来ない。彼がアメリカで学んだものは社会学であり、宗教教育学であり、帰国後は宗教教育学を自身の研究の中心に据えようとしていた様子もうかがえる<sup>36)</sup>。しかしながら、遠山が学業と研究に従事した大正から昭和初期にかけての社会事業の位置づけは現代とは大きく異なる。アメリカにおける社会事業と社会学の関係、我が国の社会問題と社会問題に内在する生活問題の関係、宗教活動及び宗教教育における社会事業実践の位置づけなど、遠山の著述内容を含めた検討が課題として残されている。今後への課題としたい。



## 注

- 1) 田代国次郎著2006「立正大学社会福祉教育の歩み－その2－」『立正社会福祉研究』第7巻2号, 21頁
- 2) 森永松信著1976「社会学科小史」『立正大学文学部論叢第55号別冊文学部50年の歩み』143頁
- 3) 森永松信著1971「大正期における仏教社会福祉」『立正大学人文科学研究年報』9頁
- 4) 森永松信著1973「昭和期における仏教社会福祉」『立正大学文学部論叢』46頁
- 5) 田代国次郎著2001「立正大学社会福祉教育の歩み－その1－」『立正社会福祉研究』第3巻1号, 69頁
- 6) 室蘭市HP <http://www.city.muroran.lg.jp/main/org1200/history.html> (2014.2.19閲覧)
- 7) 日蓮宗宗務院1931.5「月刊宗報」173号30頁
- 8) 佐々木馨著2004「北海道仏教史の研究」北海道大学図書刊行会 288頁
- 9) 函館市のホームページによれば、実行寺は1655(明暦元)年に僧清寛が庵を結んだのに始まり、1690(元禄3)年庵主日浄の時に法華寺の末寺と定め、箱館村の荒木長吉が檀頭となって建立したので日浄を開山としている。1884(明治17)年に身延総本山久遠寺の末寺に編入され、中本山格、1890(明治23)年には北海道の身延山觸頭寺に任ぜられた。函館市HP [http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/yowa/yowa\\_contents/yowa\\_013.htm](http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/yowa/yowa_contents/yowa_013.htm) (2014.2.19閲覧)
- 10) 佐々木4) 543頁～545頁 栗塚行好は、1913年12月1日に突如住職を辞任し、実行寺へ引きあげている。
- 11) 梅津福次郎(1858～1942)茨城県出身の実業家。多くの教育事業等に関与し、函館においては、函館高等水産学校(現・北海道大学水産学部)の設立、函館市立中学校(現・函館高校)の建設にあたって建設費を寄付している。函館市HP (2014.2.20閲覧)  
[http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/jimbutsu\\_ver1.0/b\\_jimbutsu/umezu\\_huku.htm](http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/jimbutsu_ver1.0/b_jimbutsu/umezu_huku.htm) なお梅津については、出生地の日立太田市郷土資料館HP等でも紹介されている。
- 12) 菅谷叶子については子細は不詳。北見市市史編纂ニュースNo265「ヌブンケン」に函館の資産家として同一人物と思われる名前を確認できたのみである。函館市史(デジタル版)をみると、明治後半から函館市内において酒造製造業を営む「丸善菅谷商店」が存在することから、菅谷叶子は丸善菅谷商店の関係者であることが推測できる。
- 13) 函館中部高等学校HP <http://www.kanchu-h.ed.jp/> (2014.2.20閲覧)
- 14) 北斗市HP <http://www.city.hokuto.hokkaido.jp/bunkazai/> (2014.2.20閲覧)
- 15) 旧制中学校の修業年数は5年であるため、入学は1908年となるが、望月の実行寺住職就任は身延町HPによると1909年であり、整合性が見つからない。この点については、精査する必要がある。
- 16) 石橋湛山著1985「湛山回想」岩波文庫 23頁～25頁
- 17) 遠山潮徳著1928「谷山生活の今昔」『吾等の大学』立正大学同窓会所収
- 18) 馬田行啓著1931「遠山潮徳君を惜しむ」『教育と宗教』第3巻第5号 教育と宗教社31頁～32頁
- 19) 馬田行啓著1928「立正大学の過去現在及び将来」『吾等の大学』立正大学同窓会所収
- 20) 遠山潮徳著1921.4「海外布教現状視察報告」『月刊宗報』53号62頁 日蓮宗宗務院
- 21) 佐々木4) 448頁
- 22) 日蓮宗宗務院1921.6「月刊宗報」55号12頁, 1921.7「月刊宗報」56号14頁
- 23) 日蓮宗宗務院1935.9「月刊宗報」225号12頁
- 24) 遠山潮徳・池田順教著1924「人と佛 日蓮主義の要領」ロサンジェルス日蓮教会  
立正大学大崎図書館には、遠山本人から寄贈された冊子が保管(大崎学報66号に遠山自身から送付の記述あり)されているが、残念なことに遠山が執筆した本文9頁から12頁までは切り取られている。
- 25) 池田順教の23回忌後に刊行された池田順康・堀教通共編1995「池田順教上人を偲ぶ」自費出版をみると、池田は1920(T9)年3月に日蓮宗大学を卒業後(遠山の2期下)、学生寮舎監、助手、陸軍入営(1年志願)後、尊敬する遠山潮徳師の勧めもあり、当時借地借家であったロサンジェルス教会の新会堂建立を目的として渡米している。遠山と共同生活を営みながら、1923年3月に日曜学校を開校し、南カリフォルニア大学の聴講生としても通学している。
- 26) 竹内道説1931「遠山潮徳君と僕」『教育と宗教』第3巻第5号 24～29頁 教育と宗教社
- 27) 森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表1993「新社会学事典」有斐閣1343頁
- 28) <http://www.talbot.edu/ce20/educators/protestant/hugh-hartshorne/> (2014.4.9閲覧)
- 29) 当時の訳出として、ハチソン・ハムソン・ハーツションと記載されている。
- 30) 「遠山潮徳君より」1925(T14)年3月『大崎学報』66号
- 31) 馬田18)
- 32) 日蓮宗宗務院1926.3「月刊宗報」111号8頁
- 33) 遠山が著述した「世の中は斯くして渡れ」『在米婦人の友』8巻5号には若き日の遠山の写真が掲載されている。
- 34) 岩崎卯一著1926「社会学の人と文献」刀江書院 9頁～10頁註
- 35) 月刊宗報34)
- 36) 大村桂巖著「遠山教授と宗教教育学」『教育と宗教』第3巻第5号 20～23頁 教育と宗教社

(2014年7月15日受理)

遠山潮徳の生涯と業績（森山）

表1 遠山潮徳 略歴

西暦	月日	元号	年齢	出来事	備考
1891	12.9	明治24年	0歳	北海道室蘭市にて、遠山聳4男として出生（原籍、室蘭市大字輪西町187）	
1903頃		明治36年	12歳	妙隆寺（北斗市）にて得度（菊池日解師）	
不詳				実行寺（函館市）望月日謙師の知遇をうける。中学入学にあたり、梅津福次郎、菅谷叶子の支援をうける。	望月師の実行寺住職在籍1909-1913
1913	3	大正2年	21歳	北海道庁立函館中学校（現、北海道函館中部高等学校）卒業（第15期）	函館中学校夜間部は1923.6から開校
1913	4	大正2年	21歳	日蓮宗大学予修科入学	
1914	4	大正3年	22歳	日蓮宗大学予科入学	
1915	4	大正4年	23歳	日蓮宗大学本科入学	
1918	3	大正7年	26歳	日蓮宗大学本科卒業	
1918	4	大正7年	26歳	日蓮宗大学研究院入学	1918.4-1921.5 給費生、研究主題、宗学
1920	11	大正9年	28歳	研究論文提出	
1920	12	大正9年	29歳	渡米 ロサンジェルス日蓮教会主任開教師就任	権僧都
1921	5	大正10年	29歳	日蓮宗大学研究院卒業	
1922	4	大正11年	30歳	日蓮宗海外留学生として米国留学扱（1927.3まで）	1921.5-1927.3 留学生、研究主題、社会学
1923	1	大正12年	31歳	ロサンジェルス日蓮教会主任開教師辞任	
1924	6	大正13年	32歳	南カルフォルニア大学卒業（Bachelor of Arts）専攻、社会学、宗教教育学 卒業後羅府新報記者、南カリフォルニア大学の調査員としてロックフェラー財団による日本人太平洋沿岸在住調査に着手	
1925	9	大正14年	33歳	コロンビア大学大学院入学	
1926	6	大正15年	34歳	コロンビア大学大学院卒業（Master of Arts）専攻、社会学、宗教教育学	
1927	3.28	昭和2年	35歳	帰朝	
1927	4	昭和2年	35歳	立正大学予科教授、学部講師、専門部講師	
1927	4			立正高等女学校教諭嘱託（死去まで）	
1927	9			立正学園女学校教諭嘱託	
1929	4	昭和4年	37歳	立正大学専門部教授、学部助教授、立正大学幹事	
1930	7	昭和5年	38歳	専門部部長事務代理	
1931	3.22	昭和6年	39歳	死去（扁桃腺炎のため）法名：潮徳院日圓聖人	遺族 夫美子（夫人）、優子（子ども）
1931	3.22				権僧正を贈られる
				その他、立正大学社会問題研究会会長、立正大学日曜学校主任、日蓮主義普及会など歴任	

参考文献 「教育と宗教」第3巻第5号 教育と宗教社 1931.5, 「立正大学一覽」昭和17年度 立正大学 1942.4, 「人と佛」ロサンジェルス日蓮教会 1924.4, 「立正大学史資料集」1995.3, 「月刊宗報」日蓮宗宗務院各号より森山作成

表2 遠山潮徳著作一覧

発行年	月	著作	出版物	発行	
1922	1	『自由恋愛の社会的暗示より在米婦人に及ぶ』	在米婦人の友 5巻1号	ロサンジェルス	
1924	4	『己心の本佛』	「人と佛 日蓮主義の要領」所収	ロサンジェルス 日蓮教会	
1924	11	『言葉づかひの改善』	在米婦人の友 7巻9号	ロサンジェルス	
1925	4	『吾等が理想の結婚の回答に対する所感』	在米婦人の友 8巻4号	ロサンジェルス	
1925	5	『世の中は斯くして渡れ』	在米婦人の友 8巻5号	ロサンジェルス	
1927	10	『筑紫の雄叫び-立正大学九州学友会布教隊として-』	日蓮主義 創刊号	日蓮宗宗務院	
	11	『自然淘汰について』	大崎学報 72号	立正大学同窓会	
1928	2	『教育思潮の宗教化』	日蓮主義 2巻2号	日蓮宗宗務院	
	3	『教育思潮の宗教化』(続き)	日蓮主義 2巻3号	日蓮宗宗務院	
	4	『宗教か経済か』	日蓮主義 2巻4号	日蓮宗宗務院	
	5	『国民よ迷う勿れ』	日蓮主義 2巻5号	日蓮宗宗務院	
	6	『不安時代の照魔鏡』	日蓮主義 2巻6号	日蓮宗宗務院	
	6	『谷山生活の今昔』	吾等の大学	立正大学同窓会	創立25周年記念誌 編集者
	7	『国際問題と宗教』	日蓮主義 2巻7号	日蓮宗宗務院	
	10	『思想は地で行け』	日蓮主義 2巻10号	日蓮宗宗務院	
	11	『The Sociological Research of The Anti-Japanese Movement in California』	大崎学報 75号	立正大学同窓会	
	12	『不戦思潮と事実』	日蓮主義 2巻12号	日蓮宗宗務院	
12	『社会事業資金連合募集に就て』	日本宗教大會紀要	日本宗教懇話会		
1929	6	『科学と宗教の闘争』	日蓮主義 3巻6号	日蓮宗宗務院	
	6	『宗派と宗教教育』	教育と宗教 第1巻第2号	教育と宗教社	
1930	1	『日蓮主義より緊縮主義へ』	日蓮主義 4巻1号	日蓮宗宗務院	
	1	『佛を如何に表示すべきか』(1)	教育と宗教 第2巻第1号	教育と宗教社	
	2	『佛を如何に表示すべきか』(2)	教育と宗教 第2巻第2号	教育と宗教社	
	2	『不安時代の宗教』	日蓮主義 4巻2号	日蓮宗宗務院	
	11	『乙女の聖火ローマンス・キャンプファイアガール』	教育と宗教 第2巻第11号	教育と宗教社	
1931	1	『日蓮大聖人の六百五十遠忌を迎えて』	日蓮主義 5巻1号	日蓮宗宗務院	コラム的なもの28 名の記述の一人
	2	『明日の人を造る明日の寺院』	日蓮主義 5巻2号	日蓮宗宗務院	絶筆と考えられる

参考文献 「教育と宗教」各号、教育と宗教社、「日蓮主義」日蓮宗宗務院各号、「在米婦人の友」文生書院版各号、「大崎学報」各号立正大学同窓会等より森山作成